

## 文明と文化の間で --

### 大阪大学グローバルコラボレーションセンターの取り組み



海外交流

宮原 暁\*

Global Collaboration between Civilization and Culture

Key Words : Paradigma Shift, Innovation, Interdisciplinary Researches, Fieldwork

#### 文理融合のパラドクス

ネガティブな話からはじめよう。「文理融合」が叫ばれるようになってから久しいが、これまでのところ、それは双方の研究者にとってどちらかという不幸な状況であった。しかし、おそらくより不幸なことは、文系と理系の諸学問の融合が不可欠な時代に、人類がめぐりあわせてしまったということであろう。

40年前に、廣松渉はこのことを痛感し、主著のひとつである『世界の共同主観的存在構造』(1972: 3 - 4頁)の序文において次のように述べた。

哲学の沈滞が叫ばれるようになってから久しい。哲学はたしかに混迷を続けている。だが、果たして諸科学はどうであろうか？ 諸科学もまた、同様に低迷しているのではないか？ (中略) 著者は、諸科学を貶めることで哲学を弁護しようというのではない。両者の間に短絡的な因果関係をつけようというのではない。いわんや、認識論の不毛が諸科学の低迷を招いたなどと主張するつもりはない。ここでは、ただ諸科学の停滞と哲学の混迷とが、問題論的構制からいって同一の根から生じていることを示唆したかったまでである。哲学は、各時代における人間の知的営為の根本的な「構図と発想」を直截に表白するものとして、好むと好まざるとにかかわらず、人類

の思想的転換局面を鋭敏に投影する。現在、旧来の発想法の全面的な逼塞が初学の停滞となって現れているのだとすれば、哲学の混迷は当の閉塞の浮標たるにほかならないであろう。

廣松の危機感をいまさらながら出発点とせざるを得ないことについては、二つの点に触れておかねばなるまい。一つは、言わずもがなのことでもあるが、危機感の先にあるパラダイムシフトが未だ完遂していないという点である。ただしパラダイムシフトはドラスティックなものとは限らず、「危機」がじつは外科手術的なパラダイムシフトによってではなく、そうした視点からみれば「小手先の弥縫策」や「延命策」に過ぎない、しかし修繕仕事のような巧みなイノベーションによって解決されてきたのではないか、という点も二つめの点として留意しておく必要がある。

本稿では、これらパラダイムシフトとイノベーションの関係をめぐって文理融合的研究の新たな地平を画定し、GLOCOLにおける諸活動をそのなかに位置づけたいと考えているが、その前に「文化」と「文明」の定義に絡めつつ、冒頭で述べた文理融合の根底にあるパラドクスを浮き彫りにし、議論の足がかりを得たいと思う。

#### 「文化」と「文明」

ここで紹介する「文化」と「文明」の定義は、教科書的な定義からはやや逸脱している。何かの用語を定義する際、語源を問うことは、常套手段の一つである。「文化」や「文明」も、ラテン語の「耕作」(colere)や「都市」「国家」(civitas)に淵源をたどることができるが、そこから何を読み取るかは理系的な見方と文系的な見方で少なからず異なっている。

雑駁に言って、理系的な見方では、「文化」の概



\*Gyo MIYABARA

1964年12月生  
東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻博士後期課程中退  
現在、大阪大学グローバルコラボレーションセンター 副センター長  
博士(社会人類学) 社会人類学  
TEL: 072-730-5420  
FAX: 072-730-5420  
E-mail: tiho@glocol.osaka-u.ac.jp

念の中心に、家族や地域社会といった担い手を見いだし、人の一生や世代といった比較的短いタイムスパンのなかで集団の固有性を紡ぎだすものとして「文化」がとらえられる。これに対して「文明」は、個々の人間に外在し、都市や国家など複雑な人間関係を管理する機構を生み出すものとされる。「文明」は、タイムスパンという点で世代交代などの人間的な尺度を超越し、この点で「文化」に対する優位性を持つ。

一方、文系的な理解、なかでも文化人類学の「文化」の定義は、人々が世界をどう認識し、人間と自然をどう管理するかを問う。「耕作」ということに絡めて言えば、食糧を確保するために自然に働きかけるのみならず、集団を組織し、そのなかでの食糧の分配を管理する仕方が「文化」ということになる。すぐに気づくことだが、その中心には、植物と動物の遺伝子のコントロール、つまり農耕と牧畜のみならず、ある意味では人の遺伝子のコントロール、つまり生産人口と消費人口の管理、集団におけるアイデンティティの管理が含まれている。

「文化」が包括的であるのに対して、「文明」は人口を管理する技術の一部ととらえられる。科学技術は、食糧の余剰を増加させる一方で、食糧生産にたずさわらぬ人口とたずさわらない人口の高度に複雑化した関係を生み出す。文系的な理解において、「文明」が人間に外在するというのは、むしろ社会的、文化的形象の物象化ととらえているのである。

理系的思考が普遍性とその阻害要因としての固有性のコンテキストで「文明」と「文化」をとらえようとするのに対して、文系的思考は、生産と再生産の管理といったコンテキストでそれをとらえる。したがって、「人間が管理できるのはせいぜい化石燃料であり、ビッグバンに由来する放射性物質の管理は人間の手に余る」といった結論に偶然、両者がたまたまたつたとしても、思考の過程と様式はまるで異なっている。理系的思考がさしあたりの出発点をデカルト的認識論に求め、人類の不遜さを反省するのに対し、文系的思考は、現象学的前提から、技術の一人歩きこそを問題にするのである。

文理融合の不幸は、人類が種々のグローバル 이슈に直面する危機的状況にあって、かたや文化の枠内から、かたや文化を否定する地点から解決策を見いだそうとし、自らに足りない部分を相手に求め

ようとする点にあらう。このことに含まれるパラドクスは、理系の研究がどちらかと言うと文明論的なパラダイムシフトを求めるのに対して、文系の研究が存外にも修繕仕事のイノベーションを志向するといった矛盾として現れる。

私たちは、まずこうした「文理融合」のパラドクスを承認するところから議論をはじめたい。文理融合の不幸がこれ以上深まらないようにするためというものもあるが、それぞれの進むべき道がこのパラドクスによって示されるからでもある。

#### グローバル人材の育成

この点から、まずは大阪大学グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)の主要な業務の一つである「グローバル人材」の育成について考えてみよう。「人材」とはなんらかの能力を持っているのは言うまでもないが、それを入口として、ある種の人的ネットワークのなかにいる人を意味する。いくら能力があっても、それのみあった人的ネットワークの枠外にいたのでは、その人の能力を活かすことはできない。このため大学での教育の使命は、第一に学生たちの人的ネットワーク構築を側面からサポートすることであるが、ある種のネットワークは、あたかもそれ自体が国際社会そのものであるかのような振る舞いをすることもあり、そうした点 - もちろん弊害ばかりではないのだろうが - に留意して、学生のキャリア形成と国家や社会の利益とのバランスをとっていく必要がある。

この点で、大阪大学がすでに持つネットワークを活性化させるとともに、自ら人的ネットワークを構築し得る力を育てることが、「グローバル人材」を育成するといった場合の課題となる。GLOCOLが大阪大学のなかで担っているのはまさに後者の部分である。

GLOCOLでは、2011年度から全学大学院生を対象とした海外体験型教育を展開してきた。そのキーワードの一つとなるのが、「フィールドワーク」である。フィールドワークとは、「調査を通して検討していくべき問題そのものの本質を明らかにした上で、具体的な一つ一つの調査課題の間の関係を整理し『構造化』していく作業」(佐藤、2002: 85, 87)であり、文系、理系を問わず、様々な専門分野に適用可能な現場密着型、仮説生成型の調査手法である。

こうした手法は、地球規模、あるいは個々の地域が直面する課題を現地での人々との対話を通じて解決するうえで有効な手段の一つとなるとともに、さまざまな専門分野の研究者や政策決定者が協働するための人的ネットワーク構築に応用することができる。フィールドワークの最初のプロセスは、現地社会との関係の生成であるが、人的ネットワークの構築も同様にネットワークのなかに自らを位置づけていくことから始まる。この点で国際機関やNGO、さらに企業、研究所などでおこなわれるインターンシップは、これらの機関をフィールドとしたフィールドワークとも言えるのである。

### GLOCOLの研究プロジェクト

GLOCOLの事業は、海外体験型教育をはじめとする現場重視の教育プログラムを足がかりに、さらに研究や実践へと展開している。ここでもたぶんフィールドワークの手法がとりいれられ、いきなりぎこちない文理融合に陥らないように、教育プログラム等の運営を通して、異なる専門分野間の対話のチャンネルが模索されている。

現在、GLOCOLでは、いくつかの文理融合型研究プロジェクトを大阪大学の各研究科と連携しつつ行っている(表参照)

これらのプロジェクトの基盤には、いずれも世界各地における人類学的フィールドワークと医学、薬学、工学の連携、協働が模索されている。こうした連携、協働から、ドラスティックなパラダイムシフトが生ずることはおそくないだろう。その点では、文明論的な見地に立つ自然科学者の期待には応えら

れないかも知れない。しかし、文化人類学が「文化」に配慮し、人間がどう世界を認識し、どうそれをコントロールするかを問う学問分野(あるいは、それらを問い直すある種の哲学)だとすれば、文化人類学と諸科学との間の協働は、現実的で人間の身の丈にあった文理融合型研究を生み出し得ると言えよう。文明論的に言えば、それは小手先の修繕仕事に過ぎないのかも知れないが、今を生きる私たちにできるのは、人類が長い年月をかけて少しずつ積み上げてきたことに、ほんの少し新しいものをつけ加えるというだけなのではなからうか。

GLOCOLの事業は、司法や医療通訳にかかわるもの、国際関係論にかかわるもの、足もとの国際化にかかわるものなど多岐にわたる。文化人類学だけを取り出してことさらに強調するのは手前味噌という感じもするが、人類学と地域研究(およびフィールドワーク)をベースに置きつつ、他分野との連携と協働による研究、教育、実践をすすめる機関は世界的に見ても珍しく、大阪大学が全国の大学に先駆けて行うモデル的な事業の一つとなり得る。その先には大がかりなパラダイムシフトがあるのかもしれないが、それは私たちが育てた次世代が見ることになるだろう。

- 佐藤郁哉 2002『フィールドワークの技法 - 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社  
 廣松 渉 1972『世界の共同主観的存在構造』勁草書房

GLOCOLの主な文理融合型研究プロジェクト(2011年度)

プログラム名称	種別
フード・セキュリティの人類学的研究	科学研究費基盤研究(A)
薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発	JST/JICA 地球規模課題 対応国際科学技術協力
アジア諸国との連携によるバイオマス利用電力自給技術に関するプログラムデザイン方法の開発	GLOCOL 共同研究
超領域アプローチによる東アジアの高齢者ケアシステムの構築	GLOCOL 共同研究
健康社会決定要因に関する日英比較研究	GLOCOL 共同研究
チベットに源を発する国際河川流域の水資源保全と地域の持続性に関する基礎研究とネットワーク構築	GLOCOL 共同研究